

3学部で学部長表彰（経営学部・商学部・ネットワーク情報学部）

経営学部

▽田中暁(2)準硬式野球部、関東地区大学準硬式野球選手権チーム優勝

商学部

▽川内将嗣(4)ボクシング部、世界選手権ライトウエルトアー級銅メダル・北京五輪出場決定▽下田尚史(3)公認会計士試験合格▽佐々木隆行(3)同▽小野寺英(3)同▽原井常勝(4)同▽古渡裕之(4)同▽坂上薫(4)弓道部、全日本学生弓道選手権個人準優勝、文武両道を実践▽山口圭太(4)第4回神奈川産学チャレンジプログラム最優秀賞▽加藤泰史(4)同▽佐藤基之(4)同▽阿部裕泰(2)07年春季全国大学対抗簿記大会個人1級の部優勝、他▽中村哲也(2)同団体戦1級の部準優勝▽塚田純平(2)同団体戦2級の部準優勝

ネットワーク情報学部

▽綿貫プロジェクト:「一村一品・知恵の環づくり 神奈川」環境教育部門賞▽ACM国際大学対抗プログラミングコンテストアジア地区予選台北大会13位入賞チーム▽飯田・小林プロジェクト:専大ベンチャービジネスコンテスト優秀賞・(株)ネクスト特別賞▽後藤貴行(3)同優秀賞・KSP特別賞▽今井秀(3)ファンドマネージャー専大グランプリ投資パフォーマンス部門優勝▽鷲山健人(3)同部門優秀賞、分析レポート部門優秀賞▽同部門団体戦優勝チーム



▲経営学部: 廣石忠司学部長から田中暁さんへ



▲商学部: 川村晃正学部長は表彰者一人ひとりと握手を交わし激励



▲ネットワーク情報学部: 中村友保学部長から各表彰者へ

養護施設「ひかりの子」を応援する「専大の会」

教員から教員家族、学生へ広がる輪

子供たちと交流スキー25年

専大の教員有志が児童養護施設「ひかりの子学園」(千葉県館山市)の子供たちと毎年交流スキー会を催し、今年25年を迎えた。

同学園は、元文学部非常勤講師の近松良之氏(故人)が1980年に設立。当時、収容児童が少ないと補助金も少ない福祉政策のもと、少人数の家庭的雰囲気施設として画期的な存在だった。しかも学資里親を募って高校まで行かせる施設であり、そのような施設は皆無であった。



▲今年の正月に実施された交流スキー会で

数年後、本学の「現代文化研究会」メンバーが実地調査で同学園を訪ねた際、近松園長から「子供たちと正月を過ごしていただけないか」と依頼された。暮れから正月にかけて子供たちは帰省するが、半数余りの身寄りがない子供たちは「居残り組」として寂しい正月を過ごす。

「泊まりがけでスキーに連れて行こう」。スキー好きの教員が揃っていたことで上越への旅行が実現。スキーの手ほどきを受けた子供たちはすぐに打ち解け、予想以上に喜んでくれた。以来、「ひかりの子を応援する専大の会」として、学生や教員の家族にも輪が広がった。

今年の正月は、子供たち17人と第1回から参加の大庭健、鐘ヶ江晴彦、宇都榮子の3教授に加え、学生や大学院生も参加した。哲学専攻博士後期課程の内藤宏樹さんはスキー1級の腕前で今年4回目の参加。修士論文で忙しく参加できなかった年に、前年親しくなった男児が「内藤のお兄ちゃんは来ないの?」ととてもがっかりしていたことを聞き、「論文は早く仕上げ、可能な限り参加しています」と笑顔で語る。

2泊3日間の宿泊は、宇都ゼミ卒業生・狩野義久さん(昭56文)が経営する苗場のロッジを利用している。子供たちの旅行費用は会員だけではまかなえず、毎回学内で寄付を募り、150人もの教員が協力している。

「年に1回だが、子供たちの笑顔に接するのはうれしい」と語る大庭教授。「スキー旅行の手伝いに来た学生たちが、夏休みに学習ボランティア活動や調査実習に同学園を訪ねるようになった。スキーで始まったひかりの子学園との交流が専大と社会とのつながりを太くする、よすがとしたい」と今後を語る。

ネットワーク情報学部

卒業制作発表会

ネットワーク情報学部では、さまざまな演習科目や3年次の必修科目「プロジェクト」を通じて、情報技術の総合的な能力を養っているが、さらに専門的な能力を身につけたいという学生には「卒業制作」という科目を設定している。

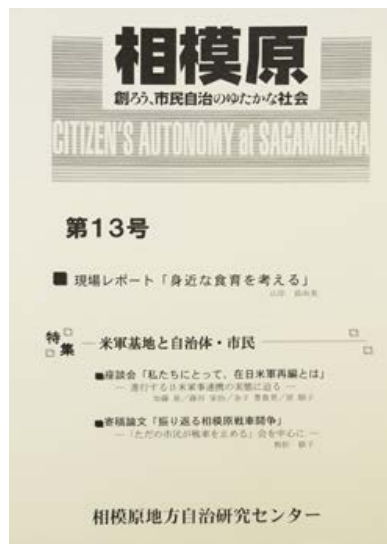
教員から1年間、緊密な指導を受けた学生たちの「卒業制作発表会」が1月24、25の両日、生田キャンパスで開かれ、プレゼンテーションや発表を通して個人やグループでの努力の成果を、共に学んだ仲間や後輩たちに披露した＝写真。



柄折敬子さんの卒論が反響「振り返る相模原戦車闘争」

今年卒業の柄折敬子さん(文学部人文学科歴史学専攻)＝7面にインタビュー＝の卒業論文「振り返る相模原戦車闘争」は、各方面で反響を呼んでいる。

ベトナム戦争時、戦場への戦車搬出を100日間阻止した市民たちの闘いを検証。論文は相模原地方自治研究センターの会報第13号＝写真＝に転載された。希望者には実費300円(送料無料)で郵送する。問い合わせは相模原地方自治研究センターへ。電話042(752)4544



社会学会大会で3学生 力作の卒業論文を発表

専修大学社会学会(柴田弘捷会長)の07年度大会が1月30日、生田キャンパスで開かれ、卒業論文で優秀な成績を収めた文学部人文学科社会学専攻4年次生3人が自作を発表。会場を埋めた後輩学生ら150人は熱心に聴き入った。

花城亜紗美さん(大矢根淳ゼミ)は阪神淡路大震災での被災者のうち転居した住民が現在どのように被災地と関わっているか、現地で調査を行った結果を発表した。

林美菜さん(秋吉美都ゼミ)は、東京ディズニーランドのリピーターがなぜ多いのかを分析。都市より地方の若者の方が訪問頻度、満足度が高い事実が浮かび上がった。

前島大祐さん(樋口博美ゼミ)は、学校でのいじめと「モンスターペアレント」に焦点を当て、教師がいじめの抑止力になるための態勢を探った。

それぞれの発表には服部あさこさん、矢崎慶太郎さん、斉穎賢さんら大学院生が批評。会場からの質問も活発だった。

専修社会学会は、社会学専攻の教員、学生とで構成され、講演会、機関誌発行などで研究の活性化や相互交流を担う。



▲会場からの質問に答える左から前島、林、花城の各4年生

セクシュアル・ハラスメント防止委員会から

「差別意識の『胚芽』」

差別意識の「胚芽」は思わぬところに出没する。ある日、教職員の集まる場で、キャンパスの夜間照明不足が話題になったとき、「女子学生が夜のキャンパスをうろつかないようにすればよい」という意見が出た。すぐさま「それは女子学生であるか否かの問題ではないでしょう」と誰かが言ったことで、この問題は性差に関係ないという理解に落ち着いたが、先の意見は、自分のもっている偏見に気づいていない例であろう。

私も、アメリカ人の知り合いが自分の主治医について話し始めたとき、思わず「その人は」というくらいのつもりで“He”という代名詞を使ってしまったことがある。知り合いはすかさず、“You are a sexist! The doctor is a woman!”と突っ込んできた。そして、「まあ、アメリカでも以前は医者のお大半が男性だったけれど…」と言って慰めてくれたものの、私はすでに「あなたは性差別主義者だ！」の一言で胸を突き刺されたような衝撃を覚え、同時に、自分に心底がっかりしていた。その医者が男性か女性か判断できなければ、まず尋ねるべきだったのである。このことは、「医者」といえば男性であると反射的に解する自分がいるということを知らされた苦い経験である。

潜在意識的に巣くう認識は、始末が悪い。しかし、それを正すのも自分であろう。出自や年齢差、職場での上下関係、教員と学生との関係においても同様である。一人ひとりが生き生きと輝けるように、キャンパスからそうした「差別」に通じる意識を一掃したいものである。

(樋口映美)